母子の歯科保健に関する研究

分担研究者　岡田昭五郎*

〈リサーチ・クェスチョン〉

１．幼児期の歯科保健対策として最も費用対効果の高いものは何か。

２．３歳児（１歳６ヵ月児）にカリオスタットを導入することはハイリスク児を発見する上で費用便益上有効か。

〈研究目的〉

近年わが国の幼児のう蝕は減少してきているが、まだう歯の多い地区もあり、ＦＤＩの提唱する西暦２０００年に５～６歳児の半数にう蝕がないようにするという目標達成はかなり困難な現状である。当面する母子歯科保健の問題点としては４～５歳児のう蝕予防であると考え、本研究班は幼児のう蝕予防対策を検討する目的で前述のリサーチクェスチョンの基に研究を行なった。

〈研究方法〉

１．岩手県、神奈川県、岡山県、鹿児島県において、３～５歳児の乳臼歯隣接面う蝕予防対策を検討する目的で隣接面の清掃、フッ化物の応用を試みた。

２．東京都区内の幼稚園児を対象として、デンタルフロスによる乳臼歯隣接面の清掃の有効性と定着性を検討した。

３．う蝕ハイリスク幼児検出の手段を検討するために北海道において質問事項とう蝕活動性試験とを組み合わせてハイリスク児検出方法を検討した。

〈研究結果ならびに考察〉

１．リサーチ・クェスチョン１について

幼児期の歯科疾患では乳臼歯隣接面に発生するう蝕が大きな問題である。その保健対策として、３歳児健診の時点まで１年に１度の健診と保健指導を行なうだけでは十分なう蝕予防効果が上がら

* 東京医科歯科大学　歯学部　予防歯科学教室

ないので、3歳以降もきめ細かい視診触診による健診と隣接面の清掃を含めた保健指導を就学まで続けて行なうことが必要である。

3～5歳の幼児の乳臼歯隣接面の清掃にも便利なデンタルフロスが市販されているが、その使用頻度は低い実情である。保護者に清掃の重要性をよく説明して使用させた結果では清掃の効果が認められた。けれども指導後期間の経過とともに使用が疎かになる傾向がみられるので、長期にわたって清掃の効果を期待するには度重なる指導が必要と思われる。

岩手県、神奈川県、岡山県で得られた結果では、乳歯隣接面のう蝕予防に薬物（酸性フッ素リン酸溶液ジェルまたはフッ化ジアンミン銀溶液）塗布の予防処置が効果的であった。検診と並行して予防処置の必要な者に対しては薬物塗布の処置を行なうのが良いと考えられる。3歳以降の幼児の歯科疾患の予防は歯みがき指導だけでなく、保護者も含めてきめ細かい指導を実施する必要がある。費用対効果という点で健診の人件費が問題になるが、これは保育所、幼稚園等の集団健診の機会を活用することでかなり解決できるが、う蝕予防には健診後のフォローが大切なので効率よく事後措置を施すよう考えて実施することが大切である。

2．リサーチ・クェスチョン2について

1歳の時点ですでにう歯やう蝕様病変のある者はう蝕ハイリスク児としてよい。う蝕は生活習慣、食習慣が深くかかわる疾患であるので、う蝕がなくても良くない生活習慣の者はハイリスク児として保健指導を徹底する必要がある。すなわち、健診頻度を多くし、歯の清掃、摂食の指導を徹底しなければならない。

幼児のう蝕の蔓延状態は地域差が大きいので、生活習慣のアンケートよりも歯垢を試料としたカリオスタットの結果だけでハイリスクを十分予測できる地域もあろう。けれども北海道で実施した結果では、費用便益上カリオスタットを併用することは必ずしも有効とは考えられなかった。現在のわが国の実情からは歯科医師による診査が行なわれるので、生活状況と口腔内状況を勘案してリスクを決めて健診と保健指導の頻度を決めるのが妥当と考えられる。

〈今後の課題〉

わが国の幼児のう蝕は減少傾向を示すが、問題がすべて解決したわけではない。次のような事項が今後の母子歯科保健の課題である。

①地域保健に移行した母子歯科保健対策マニュアルの作成。とくに3歳児健康診査を行なった後のフォローをどのように行なっていくかということ。

②祖父母等の保育と関連したう蝕予防の困難性とその解決策。

③母性の歯科保健対策

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

〈研究目的〉

近年わが国の幼児のう蝕は減少してきているが、まだう歯の多い地区もあり、FDI の提唱する西暦 2000 年に 5～6 歳児の半数にう蝕がないようにするという目標達成はかなり困難な現状である。当面する母子歯科保健の問題点としては 4～5 歳児のう蝕予防であると考え、本研究班は幼児のう蝕予防対策を検討する目的で前述のリサーチクェスチョンの基に研究を行なった。